

音楽的青二才

「才能教育」67号（一九五四年）より

鈴木鎮一

音楽が少しわかり始め、又演奏の巧拙くわしやくがわかり始めると、多くの人々は、音楽を聴かず批判する興味のために演奏を聴くようになってゆきやすい。

（中略）

勿論大家達はそのヴァイオリニストの欠点も知っておりながら、その長所をもって己が喜びとし、音楽を通して共に一夜の音楽の集まりを尊敬と共に楽しみ味わっておられるのである。

×

×

昔のことであるが、柏林ベルリンでの或る音楽会で、私のすぐ前にはエルマンが腰をかけ、左の方に私の先生のクリングラーや、ヴァイオリン製作家のハンミツヒやケスラーの面々が並んで、或るヴァイオリニストの演奏を聴いておられて、皆みな齊ひとしく楽しんでそうに聴き、心からの拍手を送り、最後までその夜の音楽の集まりを楽しそうに聴いておられた。

それは真に音楽を愛し、音楽を楽しむ人々であった。

能力が低いくせに、少しわかりかけた人々が、音楽を忘れ、他人の欠点をみつけて己を高く評価しているような情けない状態である。

×

他人の優れたところを見る眼、即ち心が育っていない人々の生活態度は、音楽的青二才の人々の態度と同じようである。

音楽だけに現われる傾向ではなく、日常生活の総てに同じようなことが言えよう。

じようである。

他人の欠点ばかりを指摘し他人を低し、としているかの如き人々は、自分が如何いかに低ひいかを知らない。

音楽を愛し、音楽を共に楽しむことが忘れられては、意味をなさないではないか。

×

下手でも、子供達が一生懸命に弾こうとしている心だけでも高く評価出来るではないか。一笑に附さないで、共に喜んで、共に音楽を楽しむことこそ、美しい生活の潤いとなつてゆく。

大家の演奏を、しかも少しばかりを聴いて「もうわかった」と言つて出て行くような生意気な、しかも音楽を少しも愛さない、能力の低い人々に、生活の喜び、潤いがある筈はずがないのである。勿論成長もない。

能力の高い、極めて優れた人々は、共に生き、共に喜び、共に育ち、共に楽しむ生き方をしてるのである。生きる喜びを、どこにでも見出す能力にまで達している人々であるからであらう。

